

小中学校における具体的支援例（H29. H30 合理的配慮実践事例集より）

1 小学校

(1) 生活支援

・視覚支援カード



対象児童:通常学級に在籍する不注意・多動傾向のある1年生児童

手立 て:多くの人数が在籍している通常学級において、教師の指示が集中して聞きにくく、また、意欲が持続しないという困り感があった。朝の用意を自分でできることを狙って、分かりやすく何をしたらよいかがわかるように視覚支援カードを作成した。

結 果:教師と一緒に準備をする中で、徐々に自分で確認しながら朝の準備ができるようになっていった。

(2) 環境整備



対象児童:通常学級に在籍する不安傾向が強い3年生児童

手立 て:聴覚過敏の困り感があり、教室の音や雰囲気などが合わず、授業は受けないという気持ちはあるが、教室に入れないということがあった。そのために、廊下に机を置き、カーテンでパーテーションを作り、自分の体調に合わせて自分で開け閉めができるようにした。目の前には窓があり、閉めても声は聞こえるような位置に設置した。

結 果:安心して自分が避難できる場所が確保できたことで、教室に入って授業を受けることができるようになった。

(3) 行事への参加

- ・運動会への参加・・・基本的に全種目参加の方向で取り組んでいる。肢体不自由の場合、子どもの状況に応じて無理なく参加できるように種目や参加内容を保護者と相談しながら実施している。
- ・宿泊行事への参加・・・参加しやすいプログラムを計画するとともに、介助の必要に応じて特別パート介助員や看護師を配置したり、車椅子の場合は介護タクシー料金も補助したりして参加しやすいように配慮を行っている。

2 中学校

(1) 学習支援

① 対象生徒 通常学級に在籍する自閉症スペクトラム障害の診断がある生徒

② 手立 て

- ・各教科のテスト時間を延長する。
- ・教師が板書をデジカメで撮影し、データーを持ち帰らせる。(家庭学習に活用するため)

③ 結 果

デジカメ撮影したものをノートに貼って評価することは難しいので、ノートに書き写す作業を家庭で取り組んでもらった。テスト時間についても、本人の集中力とのバランスを考えて保護者と協議を繰り返し15分延長で行った。

高校受験の際にも、タイムタイマーの使用、1.3倍の試験時間の延長、別室受験等の配慮を認められ、公立高校を受験して合格した。

(2) 環境整備

① 対象生徒 通常学級に在籍する難聴の生徒

② 手立て

- ・生徒の聞こえの状況に応じて座席の配慮をする。
- ・教室の机と椅子の脚にテニスボールを付け、雑音を軽減する。
- ・英語の聞き取りテストは、別室で実施する。
- ・指示が理解できているか、こまめに確認する。
- ・指示、説明の声を大きくし、明瞭な発音に努める。
- ・補聴援助システムを導入し、情報保障をする。

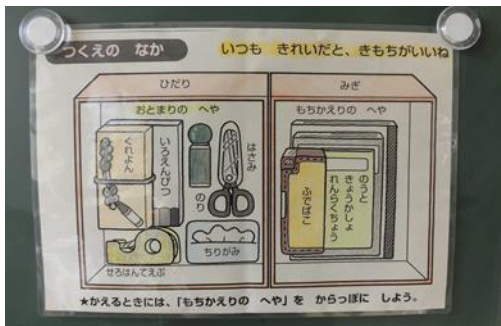


③ 結果

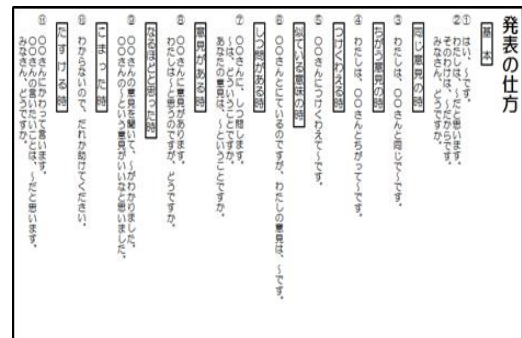
- ・同じ学級の生徒は少し大きめの声で、ゆっくりはっきり話すことを意識できるようになった。
- ・周囲の生徒も静かな環境づくりを心掛けるようになり、結果として学級全体が落ち着いた雰囲気になった。

ユニバーサルデザインの授業・学級づくりについて(誰にでもあると便利な支援策)

《机の中の整理の仕方》



《発表の仕方》



《あったか言葉とちくちく言葉》



《雑巾の絞り方》



《声の大きさ》



《しゃべらず集中》



《まなボード》

